

令和八年度入学試験問題

国 語 (人文学部・教育学部・経済科学部・医学部・創生学部)

注 意 事 項

- 一 この問題冊子は、試験開始の合図があるまで開いてはならない。
- 二 問題冊子は、全部で二十二ページある。(冊子に落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがあつた場合は申し出ること。)問題冊子の中に下書き用紙が一枚入っている。
- 三 受験する学部によって選択する問題が異なるので、左の表を見て、○印で指定された問題を解答すること。なお、問題ごとに学部別の別が記してある。

問題(ページ)	学 部				
第一問(一～八ページ)				人文学部	
第二問(九～十二ページ)				教育学部	
第三問(十三～十四ページ)				経済科学部	
第四問(十五～二十二ページ)				医学部	
				創生学部	

- 四 解答用紙は、問題冊子とは別になっている。人文学部・教育学部は三枚、経済科学部・医学部・創生学部は二枚である。
解答は、すべて解答用紙の指定された箇所に記入すること。
- 五 受験番号は、各解答用紙の指定された二箇所に必ず記入すること。
- 六 解答時間は、九十分である。
- 七 問題冊子及び下書き用紙は、持ち帰ること。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。なお、この文章は『純粹哲学の世界』という本の第三章「自由は存在するか？」の一部である。

自由に対して決定論^(注1)を対置するとき、「決まっている」ということが重要なのではない。実際、物事が将来どうなるか決まっておらず、自分の意志が偶然的に、あるいは確率的に起こったとしても、それは自由とは言えない。

自由と対立しているのは、決定論というよりも「肅々と進行している自然現象」である。決定論というのは、それを分かりやすく示す一例にすぎない。というのも、もしも物事が決定論に支配されていて事前に予知ができたとすると、そのあと「肅々と進行する」ということの証明になるからである。

それは、決定論以外にどんな世界観を持ってきたとしても同じで、確率論的な世界観（物事が将来どうなるか確率的にのみ決まっているという考え方）であろうと、目的論的な世界観（生命には自然の因果とは違い、目的に合うように行動するメカニズムがあるのではないかという考え方）であろうと、進化論的な説明（自由が進化の果てに獲得されたのだという考え方）であろうと、それらが「肅々と進行している自然現象」である限り、自由と対立してしまう。

決定論は、少なくとも自由を擁護するためには否定しておかなければならないものにすぎず、私自身が「自由がどういうものか分からない」というのは、「決定論と矛盾するから分からない」というわけではない。仮に、決定論者が^①「自由の余地を与えます」と言ったとしても、やっぱりその自由そのものがどういふものか、それが分からないのだ。

だから、私は自由があると思っっているが、自由があるということを主張したいのではなくて、自由があつたとしても、それがどういふものかよく分からないということを言いたいわけである。

それは、「肅々と進行している自然現象」の反対概念としての「自由」の分からなさである。というのも、私たちが何かを理解し

ようにするということは、すなわち、その「何か」を対象として客観的に見て、ある意味、自然現象として理解するということがある。だから「自由を理解しよう」とすること自体が、直接的に「自由」の概念と対立してしまつて、それで理解できないのだ。

私は自由の何が分からないのかを説明したいのだが、何が分からないか分からないくらい分らなくて言葉が消えてしまふので、もう少しだけシュウエンをぐるぐると回つてみたい。

^(注2)
「ビュリダンのロバ」という話がある。

ロバが右と左に同量の干し草を置かれて、まったく同量であつたためにどちらを食べるか選ぶことができず、^③ガシしてしまうという話である。

もしも、人間の思考というものを計算機にたとえたり、あるいは物質的な脳の機能としてトラえることができるのであれば、実際にこの「ビュリダンのロバ」のようなことが起こるだろう。

計算機で言うのであれば、右の干し草を食べるという選択と左の干し草を食べるという選択がまったく同程度のメリットをもたらすとき、人は決断できなくなる。あるいは、物理学的に言えば、左右からまったく同程度の引力で引っ張られて物体が動かなくなる、というようなことが脳の中で起こる。

実際には何かしらの条件の非対称性があつてこのような状況は起こらないわけだが、私が「自由」ということで何を意味しているのか、あるいは、「自由」ということで満たされなければならないことはなんなのかと言えば、まさにこの「ビュリダンのロバ」もどちらかの干し草を選んで食べることができる、ということである。

選択肢をガンゼンに並べ、自分がどちらを欲しているか、どの選択をしたら自分にとって一番良いのかということを考えてつづ、しかしその考慮によつて「機械的に」あるいは「自然と」選択するのではなく、その考慮をカンガみた上で、その考慮によつて結論が出たとしても出なかったとしても、最終的には「私」が決断を下して選択して意志を発動する。

そしてその意志は、「私」以外の何を原因として生じるのでもない。最後にトリガーを引くのは、外的な環境や強制でも内的な

欲求や習慣でもなく、「私」である。「私」こそが物事の「第一原因」でなければならない。

私はここで、何も説明していない。ひたすら自由を言い換え、同語反復しているだけである。言葉がクウテンしてしまいうらい、そのくらい人間が生きて考えているということにとって「自由」は根源的な存在なのだ。

また、こうした自分自身を「第一原因」とする自由の概念は、「行為者因果」とか「自己原因」などと呼ばれ、おそらく現代の哲学から見れば古臭い概念である。でも、どう考えても、私が「自由」と呼びうるものはこれしかないのである。

そうして、自由をそのように定義した上で、それでもやつぱり、その自由というのがなんなのか、分からない。「自由とは行為者因果だ」と言ったところで、その行為者因果がどういうものか分からない。

行為は意志が引き起こす。意志は「私」が引き起こす。

時間の順序通りに辿るなら、「私」がいて、その「私」が第一原因となって意志を生じさせ、何かの行為が生じる。

「私」でも「行為」でもない「意志」というものの存在を訝しく感じるのであれば、「命令」と言い換えてもいい。「私」がいて、その「私」が命令して、何かの行為が生じる。「自由な行為」に関する、至極自然な理解である。

しかし、その意志（命令）を、行為者としての「私」がどうやって生じさせたのかと考えるとまったくわけが分からなくなる。

意志が生じていない状態から、意志が生じた状態へと移行するとき、私は意志を「生じさせる」というわけだが、その意志自体もひとつの（精神的な）行為であるから、「自由に」行われなければならない。

では、その「自由」とは何か。自由意志によるものに他ならない。

その自由意志はどうやって発動したのか。「私」が生じさせたはずである。ならば「自由意志が意志を生じさせる」ということ自体にも、自由意志が必要ではないか。「意志の発動の自由の自由」が問われて、何も話は進んでいない。

本章の困難を短く言えば、こういうことである。勝手に発動する意志は自由ではないし、「私」が発動させる意志は発動させるための自由を必要とする。

^B 後者である場合、「私」と「意志」との距離は永遠に埋まることがない。

しかし、^(注3)事実として「腕は上がる」わけだから、その埋まることのない距離をなんらかの方法で飛び越えているはずである。その「なんらかの方法」がなんであるかを見極めるために、私は私の意志が生じる瞬間をギョウシするのだが、そこには何も特別なものは見つからない。

結局、私は未だに、幼い頃風呂場で腕を上げるときに戸惑っていたその瞬間に舞い戻ってきてしまうのである。一体、意志つてどうやって発動するのだろうか。

「自分の頭で考えましょう」という啓蒙が多い。

哲学ですら、そう言う。「自分の頭で徹底的に考え抜くことこそが哲学である」みたいな。

私は、人が本気で自分の頭で考え出したら気が狂ってしまうと思う。

最初にそう思ったのは、やはり小学校の低学年の頃だった。ふと、意識の向く先が自分自身にカイク^⑨して、「考えている自分」というものを考えてしまった。

考えるということは、少なくとも、自分の意志とは無関係に機械的に様々な観念が湧いてくるような、自動思考みたいなものではない。もし自動思考みたいなものとすれば、それはコンピュータと同じである。

人間が考えるということには、もっと、私たちが「自由」と呼んでいるような実感が付随しているはずである。「自分の頭に考えさせられている」というよりは、「私が自由に考えているのだ」と言いたくなるような、そういう実感である。

だからと言って、^c「自由に考える」ということを意識的にやろうとすると、どうやったらいいのかわからなくなる。

当時、具体的に何を考えていたのか覚えていないのだが、仮に、夜、自分の部屋で寝るか、本を読むか、考えているとしよう。

寝たいという欲求と、本を読みたいという欲求があること自体は、考えることではない。仮にものすごく眠たければ、考えるまでもなく寝てしまう。

考え出すのはだいたい、自分の心に聞いてみてもどちらかよく分からないときである。

そうすると、「なぜ今の時刻に寝なければいけないのか」とか「本は明日読めるか」とか考え出す。そこに少し、考えることの能動性みたいなものが出てくる。

一般的に、こうした思考活動は「理性」と呼ばれているはずである。

分らないのは、この理性である。

理性というのは、純粹な論理的思考ではない。日常的な思考は必ずしも「AならばB、BならばC、だからAならばCだな」という形式はしていない。

「明日は休日だからゆつくり寝ていられる」とか「でも明日は遊びに行く予定がある」とか、いろいろなことを思い浮かべるわけだが、まず分らないのは、その「いろいろなこと」を思い浮かべるときの自由さである。

勝手に思い浮かんできて、勝手に心のヒジューが傾いて、勝手に決まるのであれば、それは「考える」とは言えない。だから、私は考えているときには、能動的にいろいろなことを思い浮かべるわけだが、何を思い浮かべていいのかが分からない。

リングかミカンを食べる選択であれば、目の前にその選択肢がある。しかし、何を思い浮かべるか、という選択には、あらかじめ選択肢がない。選択肢が分かっているとしたら、すでに頭に思い浮かんでいるということである。

もしも仮に、うまいこと「明日のこと」をいろいろと思い浮かべられて、意識の中に判断材料を並べられたとしよう。そこから理性は何をしたらいいのだろうか。

その判断材料から計算機のように結論が勝手に出てくるのであれば、それは「考えている」とは言えない。そうすると、理性はまたそこで何かを能動的に働かせなければならぬのだが、一体私は「理性」の名において何をどう働かせたいのか、まるで分らない。

思い浮かべられ並べられた「明日のこと」を比較したり、そこから結論を出したり、そういう理性のひとつひとつの展開が、「自然に湧いてくる」のではなく「能動的に考える」のだとしたときの、その比較や結論の「考え」が浮かぶ前から浮かんだ後の状態

へ、私はどうやって遷移させればいいのか、それが分からない。

これらすべてのプロセスには自由な意志的行為が伴っているはずである。何かを思い浮かべたり考えたりすることも、身体的行為ではないが、能動的な精神的行為である。もしそれが「行為」と呼べないとしたら、それは自動思考のようなものであり、「自由に考える」とは言えない。

そこで「自由」が出てきて、またわけが分からなくなってしまう。

「明日のこと」が勝手に頭に思い浮かぶのではなく、「明日のこと」を能動的に頭に思い浮かべる。「明日のこと」が思い浮かんだら、そこから計算機のように結論が出るのではなく、能動的に意志を働かせて「考える」。それらの諸々の精神的行為の命令は、誰が出すのか。自分である。その命令も、自由意志によって出される。そうすると、命令することの自由意志が必要になる。以下、無限後退。

「考える」ということのどの側面をとってみても、何もかもが自由で、思考と自由とはほとんど同義なのではないかと思うくらい、考えているとそこら中で「自由」が顔を出す。

だから、自分の場合、「自分の頭で考えること」の分からなさは、結局のところ「自由」の分からなさに吸収されていくようである。

^D「自分の頭で考える」ということをスムーズにやるためには、あまり、自分の頭で考えてはいけないのだ。

（高村友也『純粹哲学の世界』による）

(注)

1 決定論——『純粹哲学の世界』では、本文よりも前の部分において、「決定論というのは、物事が将来どんなふうになるかすべて決まっているということ」と説明されている。

2 「ビュリダンのロバ」——自由意志の問題に対して決定論の立場をとった十四世紀前半のフランスの哲学者ジャン・ビュリダンが、決定論を主張したときに用いたとされるたとえ話。

3 事実として「腕は上がる」わけだから——『純粹哲学の世界』の、本文よりも前の部分に、小学校の低学年の頃に風呂場で自分が腕を上げる様子を観察しながら「自由」が理解できないものだと思ったという筆者の体験が紹介されている。そこで筆者は、「私は私の意志を行使して」腕を上げることができたものの、「私の意志」が「湧く瞬間に何が起こっているのかがよく分からな」くなって、「何度も何度も右腕を上げてみては戸惑っていた」と述べている。

問一 傍線部①～⑩のカタカナを漢字に改めよ。

問二 傍線部A「自由を理解しよう」とすること自体が、直接的に「自由」の概念と対立してしまつて」とあるが、ここで言う「対立」とはどのようなことか。本文に即して九十字以内で説明せよ。

問三 傍線部B「後者である場合、「私」と「意志」との距離は永遠に埋まることがない」とあるが、どのようなことか。本文に即して百字以内で説明せよ。

問四 傍線部C「自由に考える」とあるが、筆者のいう「自由に考える」とはどのような過程か。「理性」という語を用い、本文に即して九十字以内で説明せよ。

問五 傍線部D「自分の頭で考える」ということをスムーズにやるためには、あまり、自分の頭で考えてはいけないのだ」とあるが、なぜ「自分の頭で考えてはいけない」のか。本文に即して百二十字以内で説明せよ。

第二問 次の文章は、中納言が妹をひそかに恋慕う物語の一部である。後の問いに答えよ。

中納言、月日の過ぎ行くにつけても、思ひは消ゆることなく、日に添へてながらふべき心地もし給はず。なほ、高間の山の白雲は、胸のみ焦がれ給ふ。春の日ののどやかなるにつけても、つくづくとながめ暮らし給ふ御けしき、いと心苦しくなん。

おのれのみ岩うつ波のくだけつるかひなき浦に朽つる袖かな

とのみぞ、おぼしつづくる。

中将、内裏より出で給ひて、やがてこの御方へおはして、御物がたりなど申し給ふ。内裏などへもおぼろけにては参り給はず、さめやかに御気色も変はりて見ゆれば、いかなるべきにかと悲しくて、うち涙ぐませ給ふ。御祈りなどもかひなきにや、殿、上も、おぼし嘆くさまの心苦しさは、御物の怪のするにや、とあさましくおぼえ給ふ。「石山などに籠りて御覽ぜよ」このたまへば、

我が心祈るしるしもあらじかし命を今はかぎりと思へば

御心のうちにおぼしつづくれども、^②ともかくもいらへ給はず。

思ひだにせず、嘆きがちにて、また夏も過ぎ、秋の初風やや身にしてみて、もの心細さもとどまさり行く。いかで過ぎ行く月日にか、とおぼすも、うらめしさまさるに、まことや、中宮こそ、この春より御心地、例ならず、ときこえさせ給ふを、御匣殿など、「さにこそ」と申せば、誰も誰も思しよろこび給ふこと限りなし。やうやう、「さぶらひ給はんこともいかがあるべからん。御出であるべし」など、申し給ふを、内裏には、いとどうれしきものから心苦しくて、御祈りひまなくせさせ給ふ。

かかるほどに、九月十二日、夕べより、中宮御気色ありて、御誦経などし給ふ。殿のうち騒ぎあへり。内裏よりも御使ひひまなし。馬、車の音よりほかのこと、騒ぎののしるほどに、久しくもなやませ給はで、十三日、午の時ばかりに御産ならせ給ひ

ぬ。御よろこびどもなど、言へばおろかなり。内裏よりも、御佩刀^{はかせ}参り給ふ。今上、一の宮にてぞわたらせ給ふ。関白殿など参り給ふ。ただ、そのほどのこと、こまかに申し尽くしがたし。

中納言は若宮の御伯父なれば、いとど重くのみなり給へれば、大納言になり給ひぬ。中将は、宰相になり給ふ。兵衛^{かみ}の督は、少将になり給ふ。さまさまの御よろこびども、おしはかるべし。大納言は、官位^{つかさくらみ}もうれしとおぼされず、月日の過ぐるまに、^Yほれほれしくのみなりまさり給ふ。

(『下燃物語絵巻』による)

(注)

高間の山の白雲——二月に妹が中宮になったことを、遠くから眺めるだけで手の届かない白雲にたとえた表現。「よそに

のみみてややみなむ葛木や高間の山の峰の白雲」(『新古今和歌集』恋二)を踏まえる。

中将——中納言の弟。

さめやかに御気色も変はりて——顔から赤みが消え失せ青白くなつたことを指す。

殿、上——兄弟の両親。

石山——滋賀県大津市にある石山寺。

思ひだにせず——複雑な悲しみを抱えていることを示す表現。「我が恋の一筋ならず悲しきは逢ふをかぎりと思ひだにせず」(『狭衣物語』巻二)の上句を暗示している。

御匣殿——宮中の御装束裁縫を司る女官。

内裏には——帝は。

御佩刀——帝から下賜される守刀の御剣。

今上、一の宮にてぞわたらせ給ふ——御子は今上帝の第一皇子であることを示す。

兵衛の督——中納言の弟。

問一 二重傍線部ア「心苦しくなん」・イ「参り給はず」について、次の問いに答えよ。

(一) 例にならって文法的に説明せよ。

〔例〕「あはれ」と言ひけり。——言ひ(八行四段活用動詞「言ふ」連用形)・けり(過去の助動詞「けり」終止形)

(二) 動作主体は誰か、へより選んで答えよ。

へ 中納言 帝 中将 中宮 語り手 へ

問二 傍線部①「かひなき浦に朽つる袖かな」について、次の問いに答えよ。

(一) 「かひなき浦」に見られる和歌の表現技法を説明せよ。

(二) 中納言のどういう様子を表現しているか、傍線部①全体を三十五字以内で説明せよ。

問三 傍線部 a・b「御祈り」は、誰のために何を祈るのか、a・bそれぞれ答えよ。

問四 傍線部②「ともかくもいらへ給はず」とあるが、それはどのように考えているからか。「中将は」「中納言は」という言葉を必ず用いて百字以内で説明せよ。

問五 波線部 Y「ほればれしくのみなりまさり給ふ」という大納言の状態について、波線部 X「つくづくとながめ暮らし給ふ」と比較しながら、六十字以内で説明せよ。

第三問は次ページ

第三問

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。（設問の関係で、返り点・送りがなを省いたところがある。）

呂蒙正相公不_レ喜_レ記_ニ人過_一。初_メ参知政事、入_ニ朝堂_ニ有_ニ朝士_一于_ニ

簾内_ニ指_レ之_ヲ曰_{ハク}、「是_ノ小子_モ亦_モ参政耶_ト。」蒙正佯_{イッハリ}為_レ不_レ聞_ル而過_レ之_ヲ。其_ノ同

列怒_リ、令_レ詰_ニ其官位姓名_一。蒙正遽_②止_レ之_ヲ。罷_レ朝_ヲ、同列_③猶_モ不_レ能_レ

平_{ラカナル}、悔_ル不_ニ窮問_一。蒙正曰_{ハク}、「一_{タビ}知_ニ其姓名_一、則_{レバ}終身不能復忘_ル、固_④不_レ

如_レ無_レ知也_ト。不_ル問_ハ之_ヲ何損_{ゼント}。」時皆服_ス其量_ニ。D

（司馬光『涑水記聞』より）

(注)

呂蒙正相公——人名。北宋の政治家。相公は宰相に対する敬称。

参知政事——官職名で、副宰相にあたる。略称は参政。

朝堂——朝廷。

小子——他人を軽蔑して呼ぶ語。小僧。

同列——同僚。

罷朝——朝廷を退出する。

問一 傍線部①～④の読みを、送りがなの必要なものはそれも含めて、ひらがなで答えよ。

問二 傍線部A「令_レ詰_二其官位姓名_一」を、「其」という語の内容を明らかにして現代語訳せよ。

問三 傍線部B「則終身不能復忘」を、ひらがなのみを用いて書き下し文に改めよ。

問四 傍線部C「固不_レ如_レ無_レ知也」を、ひらがなのみを用いて書き下し文に改め、現代語訳せよ。

問五 傍線部D「時皆服_二其量_一」は、当時の人びとは皆、呂蒙正の度量に感服した、という意味である。ここでのいう呂蒙正の度量とはどういうことか。本文に即して具体的に説明せよ。

第四問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

個人が利用できるパーソナル・コンピュータ（パソコン）、そしてインターネット、さらにはスマートフォンの普及は、これらのメディアを通じて流通する情報量の爆発的な増大をもたらした。この情報量の増大は、かつてはマス・メディアによって独占されていた情報発信能力が、インターネットによって一般のユーザーに「開放」され、誰もが情報発信することが可能になったことが大きな要因だ。

インターネットのWWW（ワールド・ワイド・ウェブ）で情報発信するためには、当初はHTMLとよばれる言語を使って、ウェブページを自分で記述する必要があったが、2000年代前半から一般化した「ブログ」、さらには2000年代後半から普及が始まったSNSなどによるインターネットの「^{（注1）}フラットフォーラム化」は、特別な知識やスキルがなくても簡単に情報発信ができるメディア環境をもたらした。このような一般ユーザーによって表現・発信されるコンテンツのことをUGC（ユーザー生成コンテンツ）とよぶが、このUGCの流通を可能にするプラットフォームの普及が、流通情報量を指数関数的に増加させることになった。

人間の許容量を超える情報量の爆発的な流通によって、必要な情報を見極めたり、適切な情報選択に基づく意思決定をしたりすることが困難になる状況のことを一般に「情報オーバーロード」とよぶ。WWだけでなくSNSや動画共有サイトを含めてあらゆる情報があふれる現代のデジタル・メディア環境においては、この情報オーバーロードが常態化しているといえるだろう。メディア研究者のアレクサンダー・ハラヴェは、このような社会環境における検索エンジンの役割を、「探す」技術であるのと同じ時に「無視する」技術であると論じている。すなわち、情報オーバーロード環境においては、何かを見つけ出すというよりも、何を「無視」するのが重要な論点になるということだ。

これは、インターネット上で利用可能な情報量がいくら増加しても、人間の身体が情報を処理できる量は増えない、というある意味あたりまえの非対称性によるものだ。このような人間の情報処理の容量のことを「認知資源」とよび、ほとんど無限に供給される情報に対して、人間は限られた資源である「認知」を特定の情報に選択的に振り分ける必要に迫られる。検索エンジンのような選別のアルゴリズムは、人間が認知資源を振り向ける対象と無視する対象の選択を可能にする重要な社会的方策だということである。

情報科学者のハーバート・サイモンは、まだコンピューターやネットワークが一般に普及する以前の1970年代に、これらの経済においては人々の「アテンション」(注目)が取引対象として重要になると予言的に論じた。認知資源の制約によって、人間は単位時間あたりの「アテンション」を複数の対象に同時に振り向けることが困難であり、特定の対象に選択的に「アテンション」を振り向けることは、他の対象を無視することを意味する。つまり流通する情報量が過剰であれば、振り向けることのできる「アテンション」自体が稀少な資源であり、情報提供者からすればいかにして稀少な「アテンション」を獲得するか、こそが主要な競争原理になるということだ。

社会学者のマイケル・ゴールドハーパーは、インターネットが普及し始めた1997年に、サイモンの予言が現実化し、認知資源という制約のもとで稀少となった人々の「アテンション」が実際に競争の対象になった状況を「アテンション・エコノミー」(注目経済)という概念で指し示した。

インターネットの「プラットフォーム化」が進化した現代のデジタル・メディア環境は、UGCによってさらに情報流通量が増大し、このアテンション・エコノミーの原理がますます強まっているといえるだろう。すなわちインターネット上において重要とされることは、いかに接続するユーザーのアテンションを惹きつけられるか、であり、それはいかに「質」の高い情報(信頼性や正確性が高い情報)を提供するか、よりも優先されるということだ。なぜなら、アテンションを惹きつけられないということはその情報が無視されるということであり、存在に気づかれない以上は、その情報の「質」をいかに高めても無意味だとみなされてしまうからだ。

だからこそ、さまざまなプラットフォームのアルゴリズムが、情報の信頼性や正確性ではなく、アクセス数やCTR(クリック率)、コンバージョン・レートなどのアテンションの獲得と直結したKPI^(注5)に対して最適化されているのである。アテンション・エコノミーという経済状況において自社の収益を上げるためには、まずユーザーの稀少なアテンションを獲得することが必要条件なのだ。

この人間のアテンションに対する最適化は、人間がもつ心理特性と重なり合うことで、ときにより複雑で厄介な問題にもつながる。ここでは、心理学の分野でしばしば参照される「二重過程理論」という理論モデル^B(あくまで仮説的なモデルであり、実際の脳の機能はもつと複雑なものとされる)を確認しておく。

心理学者・行動経済学者のダニエル・カーネマンは、人間の2つの思考過程を「速い思考」と「遅い思考」と分類し、「速い思考」を実現する脳のシステムを「システム1」、「遅い思考」を実現する脳のシステムを「システム2」とよんで区別している。

システム1の「速い思考」とは、自動的・直観的にすばやく判断する思考モードのことを指す。たとえば、突然聞こえた音の方向を感知して、特に意識することなく自然とアテンションを向けてしまうようなプロセスが「速い思考」で、いわば意識的なコントロールがおよぶ前の「反応」などが含まれる。

一方の「遅い思考」とは、複雑な計算のように意識的に時間をかけて論理的な推論などを行う思考モードのことで、たとえば聞こえた声の内容を言語的に判断して、その真偽を吟味して確かめるようなことを指す。実際はこのシステム1(速い思考)とシステム2(遅い思考)は連携して処理をするが、システム1が自動的にアテンションの対象を振り分ける(音が聞こえた方向に気づかせる)のに対し、システム2はその対象にどのように対処すべきかを意識的に判断する(聞こえた音にどのように応答するかを考える)というような過程をたどる。

この「二重過程理論」を含む人間の情報処理過程にはさまざまな理論があるが、システム1のような認知資源の節約につながる情報処理方略のことを「ヒューリスティック」とよぶ。ヒューリスティックは直観や経験則に基づいて、すばやい判断を行う思考

様式で、たとえば「ちゃんとした根拠はないが」パッとみた目が外国人にみえるから日本語が通じないだろうと判断する」といった「短絡的な」判断のことを指す。

少し考えればわかるとおり、こうした判断は日常生活において認知資源を使わずにすばやく行動を決めていく際には一定の有効性があるが、偏見や差別を拡大したり、論理的でない判断をしたりしてしまう危険性と表裏一体である。ヒューリスティックは必ずしも悪いものではないが、情報の真偽の判断など慎重さを要する場面ではヒューリスティックが邪魔をすることもあるわけだ。このようなヒューリスティックなどによって判断が偏ったり論理的でなくなったりする心理的な傾向性のことは「認知バイアス」と総称される。

認知バイアスのうちよく知られているもののひとつに「確認バイアス」というものがある。これは自分の信念に合致する情報を過大評価し、合致しない情報を過小評価するという心的傾向のことである。よりわかりやすくいえば、人間は「信じたいものを信じ、信じたくないものを信じない」という判断を（特にシステム1において、無意識のうちに）しやすいということだ。一例を挙げると、自分が支持している、あるいは好きなユーチューバーが主張していることは根拠がなくても真実だと思い込みやすく、逆にそのユーチューバーに批判的なコメントがつくと、たとえそれが論理的に妥当なものであってもその正しさを認めることができないことがある。そして多くの場合、そのような確認バイアスに基づいて自分に都合のいい情報だけに選択的にアテンションを向けていること自体に気づかないのだ。

そうした人間の心理的傾向に対して、SNSなどのプラットフォームは、アルゴリズムによってユーザーのCTRや滞在時間が最大化するような情報を選別して提示する。ユーザーが「信じたい」と思う情報の方が、よりCTRが高ければ、そのような情報を（たとえそれが真実であろうとなかろうと）頻繁に表示するようにアルゴリズムが勝手に最適化してしまうわけだ。アルゴリズムと認知バイアスの相互作用によって、たとえ真偽が不明であってもユーザー（のシステム1）にとって「心地よい」情報だけが選別されたメディア環境が構築されていくことになる。

このように、アルゴリズムという一見「客観的」で「機械的」な処理は、アテンション・エコノミーという経済原理のもと、プ

プラットフォームのKPIに対して忠実に最適化を進めることで、かえってそのアルゴリズムが出力する情報の分布や真偽が不明確になってしまうという逆説をかかえることになる。これは、アテンションに最適化したアルゴリズムと、人間のシステム1による「速い思考」が、よい意味でも悪い意味でも「相性がよい」ためでもある。情報オーバーロード環境において、認知資源の節約が可能なシステム1による「速い思考」で情報を処理することは効率的である一方、システム2による「遅い思考」を積極的に働かせて情報の真偽を吟味したり論理的に熟考したりすることは「コスパ」が悪いことになってしまうからだ。

アルゴリズムは、情報オーバーロードにおける過剰な情報量を縮減すべく、フィルタリングやレコメンドを行い、タイムラインなどの認知しやすいフォーマットにあらかじめ整序してくれる。いつてみれば、アルゴリズムが選別してくれた情報をそのまま「深く考えずに」直観的に受け入れることが、脳にとつてもつとも情報処理の負荷を小さくできるわけだ。しかし、これまでみてきたとおり、そこに身を任せることにはさまざまな弊害が伴う。そのようなアルゴリズムと人間のある意味「共犯」ともいえるような相互関係について俯瞰的・批判的な視座をもつことは、アテンション・エコノミーを相対化するために重要な第一歩といえるだろう。

このアテンション・エコノミーの原理は、プラットフォーム企業側の収益獲得の最適化だけでなく、プラットフォームを利用するユーザー側の発信行動とも強く関係している。SNSで投稿するユーザー自身、意識する／しないにかかわらず、いかにして他のユーザーのアテンションを集め、いかにして「バズる」かを競うようになっていくのだ。そしてSNSのアルゴリズムは、アテンションが集まるような人気コンテンツを優遇するロジックに最適化されているために、このようなユーザー間の競争に拍車をかけることになる。

また、アテンションが集まる人気コンテンツは一度アルゴリズム上で優遇されると、さらにアテンションを集めやすいという再帰的な構造をもっている。たとえば、一定以上の「いいね」数を集めて人気のあるコンテンツ（＝アテンションが集まっているコンテンツ）だとみなされれば、アルゴリズムはそれをより多くのユーザーの表示候補リストに含めるようになり、「おすすめ」

などのタイムライン上に出現する頻度が上がる。そうすると自然と多くのユーザーがその投稿に接触するようになるため、さらにそこに「いいね」などの反応が集まる、という循環が発生するのだ。そのときそのコンテンツが真実かどうかなどの信頼性や正確性はほとんど関係がなく、単に多くの人のアテンションを集められたかどうかが重要な指標になってしまふ。

そこに他のユーザーのシステム1による直観的な判断(確証バイアスなどの偏った判断を含む)が重なることによって、ちよつとした投稿が予想外に拡散したり、誹謗中傷や炎上となつて拡大したりする構造が構築されるわけだ。SNSをはじめとするプラットフォームの情報に接する際は、直観的な反応に身を任せるのではなく、このようなアテンション・エコノミー環境におけるアルゴリズムを用いたメディアの特性と、認知バイアスなどの人間の心理特性にこそ、意識的なアテンションを払う必要があるといえるだろう。

問題は、こうした自覚のない投稿による拡散や炎上だけではない。近年では一般のユーザーであつても、まさにこのアテンション・エコノミーの経済原理を活用して広告収益をえようとするインセンティブ(注6)が働くようになっていふ。たとえばXでは投稿のインプレッション数(表示回数)が多ければ多いほど、広告収益の配分がえられるアルゴリズムが一般ユーザーにも導入されたことで、単に自己主張をしたり承認欲求を満たしたりするためではなく、金儲けのためにアテンションを集めようとする人も増えている。その中には、デマや虚偽情報を流す悪質なものも多い。このような行為は「インプレッション稼ぎ」といわれ、意図的に人々の不安や怒りの感情をあおるような(アテンションをえやすいような)情報を流すことで、自分自身のアカウントのインプレッション数を上げようとする行為を指す。

実際、2024年の能登半島地震では、被災者を装つて助けを求める投稿や、2011年の東日本大震災の津波の動画を加工して、あたかもそれが2024年に発生したかのようにみせかける投稿などが相次いだ。これは、災害のように情報に対する需要が高くアテンションを多く集めやすい状況において、共感や拡散を狙つた虚偽のコンテンツを投稿することで、アルゴリズムを活用して自身のアカウントのインプレッション数を増加させようとしたものである。このような意図的に虚偽情報を流す行為

は決して許されるものではないが、そもそも「インプレッション稼ぎ」が成り立つのは、SNSのアルゴリズムがアテンション・エコノミーに最適化され、投稿の真偽よりもアテンションを重視するしくみが構築されてしまっているからである。

（宇田川敦史『アルゴリズム・AIを疑う』による）

（注）

1 プラットフォーム——ここでは「デジタル・プラットフォーム」を指す。検索エンジンやSNSやオンラインショップなど、インターネット上でさまざまなユーザーとさまざまな情報を結びつける「場」を提供する各種サービスのこと。

2 アルゴリズム——特定の操作を実行するための計算や処理の定型的手順をいう。検索エンジンが検索結果を並べる順序も、オンラインショップが提案する「おすすめ」のラインナップも、それぞれ所定のアルゴリズムに従って決められる。

3 CTR（クリック率）——ある広告や記事へのリンクがウェブ上で表示された回数に対するクリック数の割合。

4 コンバージョン・レート——あるウェブサイトにアクセスしたユーザーのうち、当のサイトがユーザーに期待する行動（商品購入や会員登録や資料請求など）を起こした者の割合。

5 KPI——企業やプロジェクトが掲げる業績目標の達成状況を評価する際に重視される数値。

6 インセンティブ——人がある行動を起こすように仕向ける刺激や動機づけや報酬。

問一 傍線部A「情報オーバーロード環境においては、何かを見つけ出すというよりも、何を「無視」するのが重要な論点になる」とあるが、それはなぜか。本文に即して百字以内で説明せよ。

問二 傍線部B「二重過程理論」という理論モデルの概要を、本文に即して百字以内で説明せよ。

問三 傍線部C「アルゴリズムと人間のある意味「共犯」ともいえるような相互関係」とは具体的にはどのような関係か。本文に即して百字以内で説明せよ。

問四 傍線部D「アテンション・エコノミーの経済原理」はインターネットユーザーの行動にどのような変化をもたらしたのか。本文に即して百字以内で説明せよ。